

ブドウ



(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
[8月下旬～9月中旬] 収穫直後の回復と秋肥(礼肥)	収穫直後に、まず酵素液で、根と樹勢の早急な回復を図る(これが来年の始まりとして極めて大事) その後1週間程して、秋根が白く動き出して伸長しているのを確認してから、秋肥を施す(秋根が動き出す前にチッソが効くと徒長しやすい)	●根っ酵素3～5ℓを灌水(200～300倍ほどで)または500倍を葉面散布(葉が薄くなって傷んでいる場合) ●硫安10～20kg ●畑の大将<青>10～20kg ※もし酵素液を灌水しなければマンゾク粒状20kg追加 ※施用量は両方とも、普通10kgずつ。特に葉色が薄く、枝が弱く、樹が疲労し、地力が不足の場合は20kgずつ。 ※チッソ過多の秋伸び(遅伸び)や徒長を避けるため、必ず硫安と同量のカルシウムを。これで養分貯蔵が進んで枝が重く充実し、9月下旬以降に葉が美しく黄変し、一斉に落葉する。
[10月～11月] 落葉前元肥	基本となる地力作り 元肥の一部は落葉前後に強く動く根に吸収され、大部分は冬期に土壤微生物により醗酵状態にされて安定した滋養分として、春先から吸収される ※施肥位置は幹の近くだけでなく、園全体に広く均一に。散布後、軽く耕し、土と混ぜると良い 休眠期のうちに、なるべく深耕して、pHも深くまで安定させるように	●ラクトバチルス600g ●有機物・堆肥類500kg(以上、1トン程) ※ブドウであってもワラなどの有機物や牛糞などの堆肥をしっかりと投入し地力(腐植)を作る。または米ヌカ150kgを。 ●硫安40～60kg 巨峰、ピオーネ、デラウェアでは40kg。ネオマスカット、ベリーAの場合は60kg。 ※有機物が不十分で土が痩せている場合、硫酸カリ10kgを追加、または有機複合肥料でN:8kg、P:2kg、K:4kg程度の成分。 ●畑の大将<青>40～60kg ※特にカルシウム栄養が大切。施用量は硫安と同量。 ※土壌深くまでpHを測定しpHが6.2前後となるように。好適pHは5.5～6.0または6.0～7.0とされるが、やはり6.0～6.5がベスト。(欧州種のネオマスカットは7.0～7.5でも可)
[3月～6月前半] 展葉期 開花・結果期	春根が動き、発芽し、新梢が伸び、花器形成の間は、前年の蓄積養分で進むが、もしも異常な場合は、右記のように調節する 正常でも、カルシウムだけは施すのが効果的! 開花14日前のジベ処理の前に葉面散布が効果的 5月後半の開花期前から、新葉で出来る養分で生長、6月には花芽分化	①2月下旬頃に新根が動きだし、4月始め頃に発芽する迄の間、春根の動きを観察。もし弱いなら、マンゾク粒状20kg。 ②母枝全体が揃って発芽すること。もしも基部の芽が弱い場合は貯蔵養分が少ないので、畑の大将<青>20kgを。 ③葉2～3枚で花穂が現れ、新梢は勢いよく素早く展葉する。遅いようならマンゾク粒状が根っ酵素液を。徒長(巻きツルやトゲが出て先端が巻き込む)なら畑の大将<青>が花咲くCa液500倍を。 ●花咲くCa液500倍を葉面散布(または2ℓ灌水) →本年の花を良くし、翌年の分の花芽分化を順調にする。 ④5月後半～6月前半の開花期。新梢長40cm、10葉程。葉は鮮緑色、葉面積1m ² 、生葉重2.5g。カルシウム充分なら、開花中は枝伸びが止まり、花穂は副穂が発達し房が大きい。チッソ過多では花冠(キャップ)が取れず、受粉が悪い。(花ぶるい)
[6月～8月前半] 果粒肥大～成熟期	①果肉の細胞分裂期 ②果肉細胞肥大表皮細胞分裂期 ③硬核期(種子が硬化、肥大鈍る) ④着色開始、肥大・成熟期	[開花後15日間]細胞分裂を激しく進めるにはカルシウムが必須。 ●花咲くCa液500倍を葉面散布(開花10日後のジベ処理の前) [20日間] ●根っ酵素2ℓを灌水または500倍を葉面散布 追肥:硫安、畑の大将<青>各10～20kgを。 [20日間]新梢の85%が伸長停止。果実の仕上げのカルシウムを。 ●花咲くCa液500倍を葉面散布→養分転流の促進。 ※もし20日前に施していないければ、畑の大将<青>20kgをここで投入。 [15日間]新梢は伸長停止。新梢長1m、木質化(登熟)率65%以上。 ●花咲くCa液500倍を葉面散布→着色・糖度増加の促進。